

報告

バルシューレに関する報告

Report on Ballshule

佐藤 国正

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2022年9月10日 受理)

I. はじめに

筆者は本学で開催された第24回桐蔭おもしろ体験教室2022においてドイツのボール運動プログラムであるバルシューレの実施を試みた。このバルシューレの体験会では、参加者の保護者を対象として、バルシューレへの継続的参加への意向に関する調査を実施した。

本稿では、バルシューレの実施を通して垣間見えたバルシューレの理論的枠組みをコーチング学の視点で概観したうえで、バルシューレをツールとした地域連携等の活用に関する実践現場への示唆と課題を得ることを目的とする。

II. バルシューレとは

バルシューレとは、ドイツのハイデルベルク大学スポーツ科学研究所のロート教授によって開発された種目横断的なボールゲームである。ロート教授は、ドイツ国内における子どもの体力・運動能力の低下、健康への悪影響、さらには情緒の不安定や社会性の欠如といった問題解決にバルシューレが寄与できる

ものと期待していた。さらに、木村(2007)によると、ロート教授は子どもたちの基本的な運動経験の不足がスポーツの技術習得の困難につながり、スポーツ離れやスポーツ嫌いに繋がり兼ねないとする一連の悪循環に歯止めをかけるために、ボールゲームに共通する基本要素を学習させながら、運動に興味を抱かせ、スポーツを好きにさせることを祈念していたと言及している。

我が国におけるバルシューレの導入は、奈良教育大学の木村真知子教授によって行われ、その後2009年にはNPO法人バルシューレジャパンが設立され、今日ではバルシューレが体験できるスクール等が全国に散在している。

バルシューレの活動の主対象者は、子どもと設定されている。1歳半から3歳を対象とするベビーバルシューレ、3歳から6歳を対象とするミニバルシューレ、6歳から8歳を対象とするバルシューレにカテゴリーが区分されている。これらの3つのカテゴリーの全てをバルシューレとして総称されている傾向にある。このようなカテゴリーでの学習構造は段階的なものとなっており、バルシューレを複数年に亘って実施することによって多様な運動の能力の学習および獲得に及ぶと考えられている。

例えば、バルシューレの導入段階期であるベビーバルシューレでは、バルシューレABCと称され種目横断的なボールゲーム学習を行う。ミニバルシューレでは、大まかに方向づけられたボールゲーム学習として打ち返し型のボールゲームやゴール型のボールゲームが企図されている。そして最終段階であるバルシューレでは、種目別のボールゲームの学習の場としてスポーツ種目の専門的な学習の段階にあたり、ネット型やゴール型のボールゲーム種目に展開される構造となっている。

このようにバルシューレは、様々なゲーム空間を活用し、多様なボール運動の経験やゲーム経験を積むことでスポーツ種目の専門能力の獲得や向上を図ることが目的とされ、バルシューレで実施されるボールゲームのプログラム数は144種類ほど存在している。

一方で、バルシューレの指導方法とは如何なる形態を成しているのか。

我が国にバルシューレを紹介した木村(2007)によると、バルシューレは、「ティーチング・ゲームズ フォー アンダースタンディング」(Teaching Games for Understanding)や「タクティカル・アウェアネス・アプローチ」(Tactical Awareness Approach)のような顕在的学習(Explicit Learning)が示す、はっきりとわかるような指示や修正を出すような意識的な学習を促す方法をとらないという。

さらに、木村(2007)は、バルシューレのプログラム実施中には指導者は指導的な介入はせず、子どもたちが「ひたすらプレイする」ことに重点を置く指導方法を用いていることを言及し、学習者に「学習しているのだ」という意識を持たせずに、プレイに付随して知らず知らずのうちに知識や能力を学習させていく、潜在的学習(implicit Learning)の指導方法を採用していると論じている。

つまり、バルシューレでは、子どもたちの潜在的学習を促すために指導者は具体的な技術や戦術に関して言及することはなく、プロ

グラムのやり方を子どもたちに説明した後は、プログラムの実施の様子を見守るだけとなっているのである。

Ⅲ. 体験会で実施したプログラムの紹介と問題提起

今回、おもしろ体験教室の場を利用して実施したバルシューレ体験会では、144種目のなかから以下の5つのプログラムを活用した。それぞれの学習要素は表1の通りである。

- ① 投げ上げキャッチ
- ② ボールコーディネーション
- ③ ボールリレー
- ④ 的当てリレー
- ⑤ クリーン大作戦

①投げ上げキャッチでは軌道の確認、②ボールコーディネーションでは変化へのプレッシャー、③ボールリレーでは協働的なボール確保、④的当てリレーでは正確性のプレッシャー、⑤クリーン大作戦では隙の認識を学習する機会となっている。

これらのプログラムの実施においては、即席でチームを設け、チーム対抗戦方式を用いた。個人個人がプログラムを実施しながらチームメイトにリレーする形式となっている。チームの構成は体験会に参加した初対面の者同士がチームメイトになることから、お互いに協力し、仲間を励ます場面が自然発生的に生起する環境を設けている。

さて、筆者はこのようにプログラムを実施するなかで子どもたちの間に自然発生的に生起する仲間への称賛や激励の場面に、指導者はどのように関与すべきなのであろうか、または、子どもたちがプログラムを実施している最中に指導者は称賛や激励を子どもたちに対して行なう必要があるのかというコーチングの在り方についての疑問が生じている。

スポーツコーチング学の視点では、特に若年層を指導対象とする指導者の場合には、指導者は学習者の意欲の向上に繋がるように称

賛や激励をすることが求められたり、即時フィードバックが効果的であると言及されたり、その場にいる指導者の立ち居振る舞いや言葉かけが学習者に与える影響は大きいと考えられている。

バルシューレでは、指導者はプログラムの実施の仕方を子どもたちに指示するだけで特に積極的な関わりは行わない傾向にある。

NPO 法人バルシューレジャパンの理事であり、国内におけるバルシューレの指導者講習会の講師を務める福士唯男は、指導者の関わり方について「ドイツのバルシューレの指導者もプログラムの提供以外は子どもたちに積極的に声掛けすることは特にしていない」、「バルシューレの指導書や講習会においても指導者の立ち居振る舞いについて説明されることはない」とコメントしている¹⁾。

その点において、バルシューレの指導者は他のスポーツ種目の指導者とは異なる指導スタイルが求められていることとなる。バルシューレの指導者は子どもたちに魅力あるプログラムを提供することが求められており、体験会やクラスに参加する子どもの実態に応じて144種類のプログラムの構成、デザインを構築するスキルが高く求められているのかもしれない。

表1 実施したプログラムとその学習要素

プログラム	学習要素
① 投げ上げキャッチ	C. 技術 (モジュール・スキル)
② ボールコーデイネーション	B. 身のこなし (運動協調性)
③ ボールリレー	A. プレイ力 (戦術)
④ 的当てリレー	B. 身のこなし (運動協調性)
⑤ クリーン大作戦	A. プレイ力 (戦術)

V. 参加者のコメントとは

筆者が実施したバルシューレ体験会への参加者数は24名、兄弟姉妹の関係での参加から事後アンケート（保護者対象）の回答者数は19名である。回答を参照しながら、本学でのバルシューレ体験会の継続的な実施の可能性やバルシューレの活用方法を検討してみたい。

参加者に対して実施した体験会の内容についての満足度を図る質問項目では18名が「大変良い」・「良い」と回答しており、「子ども2人とも楽しそうであり、他のお友達とも交流でき、とても良い機会となりました」、「子供達が楽しく体を動かしていた。チームできそいあったり、とてもよかったです。」、「簡単なルールでもどれも楽しくすぐに夢中になって汗だくで挑戦していました。いつのまにかチームの団結力も生まれていて個々としてもチームとしても楽しんでいました。」、「体を動かすのが苦手な息子も楽しく体験できていたので良かったです。いつもは人見知りで参加できないこともあるので、楽しんでくれて良かったです。」、「運動が苦手な我が子が生き生きと楽しんでいた」とのコメントが寄せられた。

また、バルシューレ体験会への感想を問う自由記述項目では、13名が回答しているので一部を参照されたい。「ドッチボールを少しするくらいで、あまり興味を持つ機会がなかったのですが、いろいろな遊び方を私も知れて楽しかったです。」、「投げたりけったりいろいろな動きができ、楽しめていました。」、「ボールを使った新しいあそびを知ることができました。ぜひ活用したいです。」、「あまり体を動かす機会がなく、ボールが苦手でしたが、とても楽しかった。」、「子どもの体力・運動能力の低下が著しいのでよい体験になりました。」、「単純な遊びの中にも色々な動き、楽しみ方があってとても良かったです。」、「幼稚園児にはルールの理解が難しかったよ

うですが、もう少し大きくなったら勝ち負けの楽しさも分かるようになるかなと思いました。」、「指示が通るか心配していましたがなんとか頑張っていたので見ていて嬉しかったです。」、「最後まであきらめないこと技術以外の大切さを学べる点がいいなと思いました。」、以上のようなコメントが確認された。

また、今後、本学内においてバルシューレの体験会を実施した場合の参加の意向を問うた設問では、11名が「参加を希望する」と回答していた。

Ⅶ. まとめにかえて

本稿では、筆者が実施したバルシューレ体験会に関する報告とした。また、参加者のコメントを参照しながら本学におけるバルシューレ体験会の継続性を検討する機会とした。

今回のバルシューレ体験会の参加者（保護者）からは今後も参加を希望する意向が伺えた。

今日のスポーツのコーチング現場では、子どもたちに成功体験を経験させるために効率的な動きや効果的な戦術を教示したり、スポーツや競技を楽しむために、さらに運動への促進を促すためにルールを設定したりといった教材開発が盛んに成されている。

一方で、直近のコーチング現場ではこれまでの運動学習理論に一石を投じる形で新たなコーチング手法としてエコロジカル・トレーニング、エコロジカル・ダイナミクス、制約主導型トレーニングたる用語が出現してきている。バルシューレのプログラムと指導方法は、これらのコーチングの視点が十分に包含されていると指摘したうえで、今後我が国の若年層のボール運動の導入としてバルシューレが脚光を浴びる可能性に期待したい。

【注記】

- 1) 筆者が受講したバルシューレ指導者講習会における質疑応答での福士氏の回答。

【参考文献】

- 岡みゆき（2019）バルシューレ幼児期におけるすべてのボール運動に対する基礎能力育成。大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要第9号。
- 岡出美則（2018）幼少期に運動・スポーツへの楽しさを知り、基本運動能力を身に付けスムーズな導入を可能にするバルシューレの学校向けプログラムの開発及び効果検証テストの基礎調査。体育・スポーツ資質向上等推進事業報告書。スポーツ庁。
- 奥田知靖（2017）子どものボールゲーム指導プログラムバルシューレ—幼児から小学校低学年を対象に一。創文企画。
- 木村真知子（2006）迫られるスポーツによる大学の地域連携。現代スポーツ評論14。創文企画。
- 木村真知子（2007）子どものボールゲームバルシューレ。創文企画。
- 木村真知子・イエンス・ハーフ・クラウス・ロート（2007）バルシューレABCドイツ式子どものボールゲーム指導法。奈良教育大学国際化推進プロジェクト。
- 澤井省逸（2022）社会性を育む運動遊びの系統性に関する研究—バルシューレを導入したプログラム開発—。教育実践研究論文集第9巻。
- 廣瀬勝弘（2015）賢い身体づくりを志向する「バルシューレ・ハイデルベルグ」の実践報告。鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要24巻。
- 福士唯男（2017）自発的なボールゲームバルシューレの理論と実践。Coaching & Playing Volleyball : Vol:108. Unlimited.
- 福士唯男（2021）バルシューレ+バレーボール。Coaching & Playing Volleyball. Vol:117. Unlimited.
- 吉田康成（2017）子どものボール運動指導に関する一考察—ドイツのBallshule Heidelbergに着目して—。四天王寺大学教育研究実践論集。